

『茶会集』の評釈(二) — 正保元年の山里茶会 —

石井 智恵美*

An Annotation of “Chakaishu” (II):
A Great Tea Gathering Convened by Shogun Iemitsu on October 9, 1644 in the
Yamazato Osukiya Tea Room in Edo Castle

Chiemi ISHII

抄録 名古屋市蓬左文庫所蔵の茶会記『茶会集』を前報告に引き続き、今回は茶会3を評釈する。この茶会は將軍家光が毛利甲斐守秀元に命じて江戸城内の山里御数寄屋で開いたものである。この時の山里は秀忠が將軍であったときに古田織部に命じて作事させたものであるが、この茶会に際して特に作り替えたりはせず、茂った枝を払い、枯れた木を植え替えたりして、そのまま使ったことが『毛利家記』に記されている。この茶会の正客は家光、相伴客は阿部備中守正次、永井信濃守尚政、堀田加賀守正盛、柳生但馬守宗矩であったが、その他、御殿での饗応を受けた御供の衆は一千余人、山里にての振舞を受けた者は三百余人と記されており、大規模な茶会であった。

キーワード 茶会 山里御数寄屋 家光 毛利秀元

はじめに

『茶会集』は「前報告でも述べたが、名古屋市蓬左文庫に所蔵される茶会記である。その内容の多くは大名家の茶会の記録であり、尾張徳川家の記録に限定されている訳ではない。今回は前報告に掲載した表1「『茶会集』に記録される茶会」の中から茶会3について評釈する。この茶会は將軍家光が毛利甲斐守秀元に命じて江戸城の山里御数寄屋で開いたものである。『茶会集』の記録は前報告で「その時々で書きとめられてきた茶会の記録を享和二年以降に写しまとめたもの」と推測したが、茶会3の書き出しには『大猷院様御代』と記されてお

り、家光の死後に書かれたものであることが分かる。

渡辺良次郎氏の『徳川家光と茶道』によれば「家光も秀忠に倣い、大名邸を歴訪している。しかし、秀忠が死去してからの御成は、極端にその回数が減少し(中略)この現象は、幕府の支配体制が固まり、御成本来の意義・必要性が薄れてきた当時の社会情勢、あるいは過大な財政的負担の回避などに理由を求めることができよう」と推測している。秀忠の死後、家光による他邸への正式な御成の回数は減少

* いしい ちえみ 文教大学教育学部学校教育課程家庭専修

したが、渡辺氏によれば「寛永十年六月二十二日、酒井忠世が江戸城西の丸に家光を迎え、饗応したのを皮切りに、尾張義直・紀伊頼宣・水戸頼房・堀田正盛・土井利勝・阿部重次・永井尚政・柳生宗矩・毛利秀元・阿部忠秋・青山幸成・酒井忠勝・牧野親成・板倉重宗・内田正信・朽木植綱・内藤忠重・伊達政宗らが二ノ丸・西ノ丸で家光を饗している。これは、明らかに御成の簡素化現象であり、家光の意向の反映でもあった」としている。本報でとりあげる茶会³は、正保元年（一六四四）十月九日に毛利秀元が江戸城西ノ丸の山里御数寄屋で家光を饗する茶会である。しかし、その規模は大きく、²『毛利家記』によればこの日、「一御供ノ衆於御殿ノ御饗一千余人 山里ニテノ御振舞三百余人」と記録されている。この規模の大きさを考えると、どれほどの「過大な財政的負担の回避」となったのかは疑問である。この日、山里御数寄屋での茶会の後、家光は御相伴衆と共に御殿の広間へ出御し、御能三番（高砂・八嶋・井筒）を鑑賞したが、それに先立ち茶会の次第の中の御本膳（後述）とは別に「式正の御膳」が出されている。その内容は次のとおりである。

「 初献

昆布

勝栗

数ノ子

熨計

梅干

御吸物 鯛ヒレ

御本膳

塩引

タコ カマホコ

アエマセ

御湯漬

箸ノ臺

カウノ物

フタメ桶

箸ノ臺

二（ノ膳）

カラスミ 鮎 御汁アツメ

貝盛

※タリ サメノ魚ナリ クラゲ

白鳥

三（ノ膳）

羽モリ

御汁 鯉

※タリ

サッヘ

御汁 鯛

「ニタリ」か。

船モリ

御汁 鯛

小型のサメ。

フナ

御吸物

ヒシホイリ

ウノ花イリ

御盃ノ臺

二ツ星 カラスミ

ノリ

御菓子 九種

」

後述の本文中の注（1）、（52―②4・②5）でも示すが、家光の茶湯の心得は渡辺氏によれば「かなりあったことを窺わせる」としている。寛永十七年（一六四〇）九月十六日（家光三十七歳 茶会²参照）の記録によれば、家光の命により品川御殿において毛利甲斐守秀元が家光に御茶を奉献したが、その時の秀元の手前が家光は覚えていないとしている。更に正保三年（一六四六、家光四二歳）七月廿七日には、叔父である尾張大納言義直卿を饗する茶会で「御手になやましますゆえ」という理由で永井信濃守尚政に名代として茶を点てさせている。尚政は正保四年（一六四七）五月廿八日にも同じく家光の叔父である紀伊大納言頼宣卿を饗する茶会で家光の名代として茶を点じている。家光は自身で手（点）前をせず、茶の湯の得意な永井尚政に委ねてい

る。これらを考え合わせると、家光は御茶の手前に関しては不得手であった可能性がある。

凡例

一、本書は名古屋蓬左文庫の架蔵にかかるものである。
一、翻刻にあたっては、原本の体裁を残すことを原則としたが、現在不使用の古体字・異体字は■で表し、その下に「」括弧で現在の文字を入れた。

一、『毛利家記』は内閣文庫所蔵の全六巻本を用いた。
一、『角川茶道大辞典』は本文中では『角川茶道』と略した。
一、『新版茶道大辞典』は本文中では『新版茶道』と略した。
一、『日本国語大辞典第二版』は本文中では『日国Ⅱ』と略した。
一、本書の翻刻・掲載の御許可を賜った名古屋蓬左文庫に厚く深謝いたします。

表紙 乾
表紙 坤

〔茶会3 影印〕

大猷院様御代
一 正保元申十月五日毛利甲斐守秀元出
西丸御茶指上

山里御数寄屋

懸物 南堂

花入 桃尻 長薄板二置

花盆唐物有乳手小刀二本高麗刀
壺ツ花入水次染付友蓋

御釜 漳(障)破利名物

水指 冠箱名物

茶入 国清寺名物

袋 丹地丸籠ノ金襴

御茶碗 今焼

御茶杓 古田織部作
虫喰竹

御水次 片口イシ、塗

蓋置 竹輪

炭斗 ふくへ

〔茶会3 原文〕

大猷院様御代

一 正保元申十月五日毛利甲斐守秀元出
西丸御茶指上

山里御数寄屋

懸物 南堂

花入 桃尻 長薄板二置

花盆唐物有乳手小刀二本高麗刀

壺ツ花入水次染付友蓋

御釜 漳(障)破利名物

水指 冠箱名物

茶入 国清寺名物

袋 丹地丸籠ノ金襴

御茶碗 今焼

御茶杓 古田織部作
虫喰竹

御水次 片口イシ、塗

蓋置 竹輪

炭斗 ふくへ

山香合 圓青貝 伽羅夕霧入

羽箒 鶴ノ蚊橋羽

山下懸茶碗 白高麗

御勝手之間

香炳 高麗白手ノ獅子

香合式ツ 壺ツ四角蒔繪 片輪車

東山殿御物内ニ薰物ヲ入一ツ菱形

省略部分①有↓

青貝 唐物内ニ伽羅大井川ヲ入

掛箒 鶴ノ本白

山茶釜 八景 自在ニ懸ル

休臺子

御茶入 尻ふくら黒樂 名物

袋 白極

イイシヤウノ盆二載

天目 灰擔 名物臺二載

臺 天笠着 名物

茶杓 シユトク 竹節なし

水指 唐金 象耳 友蓋

御香合 圓青貝 伽羅夕霧入

羽箒 鶴ノ蚊橋羽

御下懸茶碗 白高麗

御勝手之間

香炳 高麗白手ノ獅子

香合式ツ 壺ツ四角蒔繪 片輪車

東山殿御物内ニ薰物ヲ入一ツ菱形

青貝 唐物内ニ伽羅大井川ヲ入

↓省略部分①

掛箒 鶴ノ本白

御茶釜 八景 自在ニ懸ル

休臺子

御茶入 尻ふくら黒樂 名物

袋 白極

イイシヤウノ盆二載

天目 灰擔 名物臺二載

臺 天笠着 名物

茶杓 シユトク 竹節なし

水指 唐金 象耳 友蓋

水覆 金ノ物 三足

茶籠置 金ノ塔

茶籠置 高麗平茶碗

省略部分②有↓

十畳敷

御花入 金ノ物口ニ鑿有圓イシ、(イジイジ)

御釜 楊貴妃 名物

御袋棚

御茶入 高麗 或高原

袋柿地壞梅二丸龍金鏝

御茶碗 吉野高麗

御茶杓 利休写織部作 サヒ竹

水指 南蛮物 有罌

水飜 鈴減金彫アリ木香形

蓋置 竹輪

省略部分④有↓

右之外 御写々々之飾略之

御数寄屋御献立

御本膳

水覆(みずこぼし) 金之物 三足

蓋置 金之塔

茶籠置 高麗平茶碗

十畳敷

二畳臺上段之棚

御花入 金ノ物口ニ鑿有圓イシ、(イジイジ) 塗簿板ニノル

御釜 楊貴妃 名物

御袋棚

御茶入 高麗 或高原

袋柿地壞梅二丸龍金鏝

御茶碗 吉野高麗

御茶杓 利休写織部作 サヒ竹

水指 南蛮物 有罌

水飜 鈴減金彫アリ木香形

蓋置 竹輪

右之外 御写々々之飾略之

省略部分④有↓

御数寄屋御献立

御本膳

山菜子
 著蕨 紙水 美濃柿
 御相伴
 阿部豊後守正次
 永井美濃守尚政
 堀田加賀守正盛
 柳生但馬守
 御引物
 小鯛 了燒 煮鳥 鴨 新め和 枸杞
 山吸物 蝦 白魚 御吸物 蛎 鮎 白魚
 御肴 鴨 抱
 蝦 蒲葺 鱧子 鱧子 鱧子
 煮染 麩 小細螺 常伏 草魚 常伏 草魚
 切燒 鮭 鯛ノ臍 鯛鳥 御汁 鴈牛蒡 獨活
 枕燒 二 香之物 密柑 山葵 御食
 御繪 栗 生薑 鱈 御汁 アンカウ
 二 網音 網音 網音
 杖燒 網音 網音 網音
 切燒 鯛鳥 御汁 鴈牛蒡 獨活
 御肴 鴨 抱
 蝦 蒲葺 鱧子 鱧子 鱧子
 煮染 麩 小細螺 常伏 草魚
 山菜子
 著蕨 紙水 美濃柿
 御相伴
 阿部豊後守正次
 永井美濃守尚政
 堀田加賀守正盛
 柳生但馬守

御数寄屋之御花ハ
公方様被拵梅と菊也

一 御能過又御数寄屋江被為入此時
尊圓法親王之被極タイルイロハラ曲輪之
盆ニ載テ献上ス

此節金森丸壺被下也

〔現代語訳〕

大猷院様の御代

一 正保元年甲子十月五日(正しくは九日)に毛利甲斐守秀元が西丸に出御し、將軍家光に御茶を差し上げた。場所は山里御数寄屋である。掛物は南堂の墨蹟、花入は桃尻で長い薄板の上に置かれていた。花盆は唐物で乳手(取手)がある。小刀二本と高麗の刀(ハサミ)壺つ、花入、水次、染付の共蓋。御釜は漳破利(上張)で名物である。水指は冠箱で名物である。茶入は国清寺という銘で名物である。仕覆は丹地で丸龍の金襴である。御茶碗は今焼。御茶杓は古田織部作の虫喰竹である。御水次は片口のイジイジ塗り。蓋置は竹輪。炭斗は瓢箪である。御香合は円い青貝で伽羅の夕霧(霧)を入れてある。羽箒は鶴の蚊挿羽。御下懸(建水に代用した)茶碗は白高麗である。

お勝手の間は次のようである。

香炉は高麗の白手の獅子の飾りのついた香炉。香合は二つあり、一つは四角で片輪車の模様の蒔絵がある。この東山殿御物の中に薫物を入れる。もう一つは菱形の青貝の香合で唐物である。中に伽羅の大井川を入れる。掛箒は鶴の本白の羽である。御茶釜は八景の模様があり、自在に懸かっていた。休臺子の上の飾りは以下の通りである。御

御数寄屋之御花ハ
公方様被拵梅と菊也

一 御能過又御数寄屋江被為入此時
尊圓法親王之被極タイルイロハラ曲輪之
盆ニ載テ献上ス

此節金森丸壺被下也

茶入は尻ふくら型の黒楽茶入で名物である。仕覆は白極緞子で佳漿の盆に載せてあった。天目は灰かつぎ茶碗で名物の台に載せてあった。台は尼崎台で名物である。茶杓は珠徳作で竹の節はない。水指は唐金製で象耳が付き、共蓋がある。水覆は金属製で三足がある。蓋置は金の塔の形をしている。茶筥置は高麗の平茶碗である。

十畳敷の間の室礼は次のようである。

二畳敷の台の上段の棚の飾りは次のようである。御花入は金属製の物で口に鏝があり円いイジイジ塗りの薄板に載せる。御釜の銘は楊貴妃であり、名物である。御袋棚の上の飾りは次のようである。御茶入は高麗物、或いは高原物である。仕覆は柿地の壞梅模様に丸龍の金襴。御茶碗は吉野高麗。御茶杓は利休の写しで織部作。さび竹である。水指は南蛮物で鏝がある。建水は錫のメッキがなされ彫物のある木香形である。蓋置は竹輪である。右の他、記録すべき飾りは多々あるが省略した。

御数寄屋で振舞われたお献立は次の通りである。御本膳は御鱈(鱈・生薑・栗・山葵・蜜柑)、御汁(具はアンコウ)、御飯と香の物。

二の膳は、杉焼(鯛・鳥・ほらの臍)、御汁(具は鴈・午房・独活)、切焼は鮭の青串。御引物は小鯛の一つ焼、鴨の煮鳥、枸杞の新芽和

え。御吸物は（鮒・かき・白魚）。御肴はたいらぎ、蒲鉾、からすみ、焼鳥は鶉、煮しめは麩と小さざえ、とこぶし、たこである。御菓子は薯蕷^{やまのいも}、寄水^{よりみず}という菓子、美濃柿である。

御相伴は阿部豊後守正次（正しくは、備中守）、永井美濃守尚政（正しくは、信濃守）、堀田加賀守正盛、柳生但馬守宗矩であった。御数寄屋の御花は、公方様（家光）が梅と菊とを生けられた。

一 御能が過ぎてまた御数寄屋へ入られた。この時、尊円法親王が書かれた「いろは」の書を曲輪の盆に載せて献上した。此の折、金森丸壺が下された。

（注）

（1）大猷院 江戸幕府第三代將軍徳川家光の法号。家光は二代將軍秀忠の次男であり、母は秀忠の正室お江。幼名は竹千代。生没年は慶長九年（一六〇四）七月一七日〜慶安四年（一六五二）四月二十日。元和六年（一六二〇）正三位権大納言となり、同九年（一六二三）將軍宣下を受けた。この時、従一位左大臣に進む。將軍在位は元和九年〜慶安四年までの約二八年間である。家光がいつ頃から茶の湯を嗜み始めたのか、その確かな時期は不明である。しかし、徳川將軍家が徳川一門に対して行った初めての御成とされている元和九年二月十三日の尾張徳川鼠穴邸への秀忠の御成の五日後に家光（当時二十歳）も尾張邸への御成を果たしている。²渡辺良次郎氏は「当時、御成の次第として茶湯が饗応の主部を占めたことから、この頃すでかなりの茶湯の心得があったことを窺わせる。」と推測している。しかしながら、『毛利家記 六終』には「一正保元年八月下旬ノ比家光將軍、秀元卿へ被仰シハ甲斐守数寄ノ道不暗由聞シ故先年品川ニテ手前ヲ見タリト雖モ其時ハ遊具ノミニテ強ニ手前ノ心ニ不留候、近年ハ数寄ノ道瓦礫ニ成リテ面を任我意其ノ道猥礼タリト覚ケレハ、西ノ丸ノ山里ニテ今一度数寄ノ奥行候へト

御誼有シ」とある。この「先年品川ニテ手前ヲ見タリ」というのは寛永一七年（一六四〇）九月一六日（「前報告 茶会2 参照」）に秀元が品川において家光にお茶を奉献したことを指す。これを見ると、家光は茶の手前のことは気にしていない様子が窺え、この時から遡ること一七年、元和九年の当時の家光はまだ茶の湯に対する関心が希薄だった可能性がある。

（2）正保元申（一六四四）十月五日 本茶会が西ノ丸山里御数寄屋で行われた日であるが、正しくは十月九日である。『毛利家記 六終』によれば「十月九日ニ御数寄屋ノ催可有旨被仰シニ依テ」、更に「先西ノ丸ノ惣疊ヲ新シク敷替十月五日ヨリ御座席ヲカサラセ給ヒシ」とあり、先ずは、畳を新しく敷き替えた後の十月五日より道具類の準備を始め、十月九日に饗応があったことが分かる。

（3）毛利甲斐守秀元「寛永十七年九月一六日 毛利甲斐守秀元於品川 御茶奉献」前報告の茶会2の注（5）参照。³『徳川実記』（大猷院記）によれば秀忠・家光の茶に関わる記述の中に秀元もしばしば登場する。以下に示す。

（献茶）

①寛永十七年九月十六日条 品川の御殿にて。毛利甲斐守秀元（家光に）御茶奉る。

②正保元年十月九日条 山里の御茶室にて毛利甲斐守秀元（家光に）御茶を献ず。

（相伴）

①寛永五年正月十九日条 西城にて朝夕両度の御茶事（大御所秀忠）あり。秀元は夕の茶事の客。

②寛永七年四月十一日条 大御所（秀忠）仙臺中納言正宗卿のもとへ行かれた。秀元も相伴客として陪す。

③寛永七年十月五日条 今日も西城にて（家光の）御茶あり。秀元は朝の茶事の客。

- ④寛永八年正月二十一日条 西城にて 大御所(秀忠の)御茶事あり。秀元は夕の茶事の客。
- ⑤寛永八年二月三日条 御茶事(家光)あり。秀元は夕の茶事の客。
- ⑥寛永十一年三月朔日条 御茶(家光)あり。三卿并秀元に御茶をたまう。
- ⑦寛永十二年正月十一日条 御茶事(家光)あり。秀元は夕の茶事の客。
- ⑧寛永十三年七月十日条(家光) 尾紀水の三卿を二丸茶寮に招き、御茶給わる。秀元も伴食。永井信濃守尚政御名代として。點茶。御仕えしたので。御衣并上下を給わる。
- ⑨寛永十六年十一月十一日条 数寄屋にて今朝尾水両卿并秀元(家光より)御茶を給わる。
- ⑩寛永十六年十二月二十一日条(家光) 澁谷邊へ行かれ、柳生但馬守宗矩のもとに立寄り茶宴あり。秀元も御相伴に伺候す。
- ⑪寛永十七年三月三日条 此日尾紀水三卿(家光より)御茶を給う。秀元も相伴。
- ⑫正保元年三月朔日条(家光) 尾張大納言義直卿外山の別荘に行き、秀元も茶室にて御相伴に陪す。
- ⑬正保元年七月廿八日条(家光) 二丸御茶室にて御風呂の御茶あり。三卿并秀元ら、これを給う。
- ⑭正保元年十二月八日条(家光) 水戸中納言頼房卿のもとへ行き、茶室にて御茶をされた。秀元も相伴にまいる。
- ⑮正保二年十一月十九日条(家光臨駕) 堀田加賀守正盛草別墅に行き、茶室にて御茶獻る。御相伴は秀元。
- ⑯正保二年十二月六日条(家光臨駕) 井伊掃部頭直孝が別業に行き、茶室にて秀元も御相伴。
- ⑰正保三年七月廿七日条 尾張亞相辭見あり。二丸御茶室にて(家

光より)御茶を給う。秀元も相伴。

(4) 山里 山里は『日国Ⅱ』によれば、「(1)山の中にある人里。山間の村。(2)に建てた貴族の別荘。山荘。(3)山奥の家。やまが。」などと説明されているが、もう一つ、「江戸城西の丸の吹上庭園にある場所」との説明もある。天正十一年(一五八三)、に豊臣秀吉により大坂城に設けられた松林の庭園を山里と呼び、本丸、二丸、三丸などと近世、中世の城郭で城を構成する部分を丸を付けて言い表したことから、城郭内の山里周辺も山里丸と称された。大坂城の山里丸には二疊敷と三疊敷の茶室があったことが『輝元公上洛日記』の天正十六年(一五八八)九月九日条に「未刻に関白様へ御茶湯に御参候隆景様廣家様安國寺御供山里の御茶屋 一御座敷三疊敷の萱茸也(中略)後のうす茶の御座敷二疊敷なり(中略)何も関白様御手前なり」と記載されている。この他、伏見城、^{5,6}聚楽第、名護屋城にも山里が設けられていた。江戸城の山里については山内彩子氏が『江戸城庭園考―「山里」を中心として―』の中で「家光が三代將軍になったのは、天下統一後十年を経た寛永元年(一六二四)である。ただ、「山里」は西丸御殿の後園として、秀忠が逝去する寛永九年(一六三二)まではその影響下にあったと考えられる。將軍家光は本丸に住み、その後園として二丸を整備したので、本丸御殿と二丸、西丸御殿と「山里」という、後園を伴った二つの城が並立する形になった。しかし寛永十〜二十年(一六三三〜一六四三)にかけて、(中略)本丸、西丸並立のバランスは崩れていった。特に本丸御殿改造時には城の全機能が西丸に集中したために、「山里」は以前の茶のための空間ではなく、(中略)將軍の遊興が、茶事を中心とするものから、庭の景を楽しむ方向に変化して、食事や茶はそれに付随するものとなり、それに伴い庭も変遷の道を辿った」としている。三代將軍家光の事跡を描きこんだと言われる。歴博本江戸図屏風の左隻に描かれる「西之丸」の後方に鬱蒼とした森があ

り、その中に埋もれるように萱葺の茶屋と思しき建物が見える。そこが江戸城の山里御数寄屋と考えられる。

(5) 桃尻 ももじり 名物茶壺の銘としても知られているが、ここでは花入の形状名称として登場している。竹内順一氏によれば、『四大茶会記をよむ(一七九) 桃尻の花入』の中で「桃尻は古銅細口花入の種類名称です。現存する同類の形状から類推すれば、底部が桃の実を思わすようなやわらかな膨らみを呈しています。ややこしいことに別名に「桃底」があり、こう呼ぶ場合は高台がなく、また糸切り底ではない、という説(『角川茶道大辞典』など)があります。しかし、高台のない「桃」のような丸みを帯びた底でも桃尻という例があり、桃山時代から桃尻と桃底とは混用されてきました。」としている。¹⁰『山上宗二記』には「花入事」の項目に「一桃尻 関白様 本ハ珠光所持也、但、古銅花入、天下一名物、五通ノ文ヲ指、四方盆ニスハル、一桃尻 文を五通サス、四方盆ニスハル、本ハ引拙、平野ニ在リ、一桃尻 是モ名物文ヲ五通サス、四方盆ニスハル、京醫師道三ニ在リ」と三点の桃尻花入が特筆されている。

(6) 「乳手」と読めるが、『毛利家記』では「取手」と記されている。

(7) 「刀」と読めるが、『毛利家記』では「ハサミ」と記されている。

(8) 漳破利 じょうはり 茶の湯釜の一種、上張釜のこと。常張、定張とも書く。鑲付きが斜め上方に張り出している形の釜である。¹⁰『山上宗二記』の「名物の釜」の項目には「紹鷗のじょうはり」が採り上げられているが、上張釜の形については詳しく説明されている史料を見つけないことができず、詳細は不明である。ちなみに、香取秀眞氏が昭和五年に恩賜京都博物館の第七回夏季講演会「茶之湯釜に就て」のためにまとめた¹¹『新撰釜師系譜』の巻末の付録には「常張釜」の小さな図を見ることができ、説明等もなく詳細はやはり不明である。

(9) 今焼 いまやき 新焼ともいうが、¹²『宗湛日記』の天正十四年

(一五八六)十一月廿七日期の「下京四條 宗逸」の会に「茶碗今やき」と記載されたのが初見とされている。『茶道古典全集』第六巻の宗湛日記では、この「今やき」の注として「當時わが国で新しく焼成された茶碗。楽焼などを指す。」と説明している。¹⁰『山上宗二記』(天正十六年(一五八八))には「惣テ茶碗ハ唐茶盃スタリ、当世ハ高麗茶盃、瀬戸茶盃、今焼ノ茶盃迄也」という記述があり、この当時は唐物茶碗がなくても茶湯を楽しんだ様子が窺える。

(10) 古田織部 ふるたおりべ 安土桃山時代・江戸時代前期の武将。また、茶人でもある。生没年は天文十三年(一五四四)〜慶長二十年(一六一五)六月十一日。初名は景安。天正十六年(一五八八)頃、重然と改めた。通称は佐助。古田織部は¹³『江岑夏書』に利休弟子衆七人衆の七番目として位置づけられているが、「此内、織部一茶之湯能無候」とあり、七人衆の中で一番茶の湯の才能がなかったと説明されている。しかし、寛永十九年(一六四二)九月一六日の江戸品川御殿の新亭(茶会2)と正保元年(一六四四)十月九日江戸城西ノ丸山里御数寄屋(茶会3)と二度も家光の命により献茶をした毛利甲斐守秀元は数寄の道に達した人物として知られており、古田織部の高弟でもあった。浅野次郎氏他は¹⁴「わび茶と露地(茶庭)の変遷に関する史的考察——織部から遠州へ——」の中で、古田織部は茶室を広く明るく開放的なものとしたり、茶庭には二重露地を採用したり、石灯籠を茶庭の「景」として扱う(織部灯笼)など、様々な趣向を試みていることに言及している。『毛利家記 六終』には西ノ丸山里御数寄屋での茶会をもつに当たり「十月九日ニ御数寄ノ催可有旨被仰シニヨリテ(中略)山里へ御出有テ彼是見シニ秀忠將軍ノ御時古田織部ニ被仰付、物毎ノ上手ヲ集テ数月心ヲ悴調シ御作事ナレバ心モ詞モ不被及」とあり、秀忠が將軍であった時に古田織部に命じて山里の作事を任せられたことが分かる。また、古田織部と言えは「へウケモノ」として夙に知られているが、

これは¹²『宗湛日記』慶長四年（一五九九）二月二十八日条に記載された織部の茶会で薄茶に用いた茶碗の形が歪んで（ヘウケテ）いたため、その茶碗を指して宗湛が「ヘウケモノ」と表現したものである。中村修也氏は¹⁵「茶に生きた人 古田織部（前編）―茶人織部の登場―」の中で、この当時「ヘウゲタ」茶碗を使ったのは織部のみではなく、毛利輝元、黒田長政、上田覚甫等も使用していたことをそれぞれの史料を示して説明し、「むしろ慶長期の茶碗の流行であった可能性の方が高い。」と推測している。

(11) 虫喰 むしくい 『新版茶道』では「虫喰の疵のあるもの」と説明されており、主に茶杓が鑑賞の対象となっている。虫喰の茶杓は節の周辺や樋の部分に虫喰の穴や深い傷のあるものをいう。本茶会で用いられた茶杓の銘が「虫喰竹」であるかどうかはわからないが、西山松之助氏が¹⁶「銘杓拝見（最終回）古田織部」で、五島美術館蔵の「虫喰」のある茶杓を紹介している。虫喰の穴を見どころとする茶杓は畠山記念館蔵の「銘 青苔^{せいたい}」で、中節に大きな虫喰穴がある。小堀遠州が松花堂昭乗から掛軸をもらった返礼に贈った茶杓と言われている。

(12) イジイジ塗 イヂイヂ塗 いじ塗 『角川茶道』によれば「古い茶道具に多い。塗面に砂粒を蒔いたような隆起があり、地の粉のやせを見せたような塗り肌である。例えば石の粉末を混ぜて下地を施し地瘦せを予期して塗り上げたもの」と説明されている。京において代々「道志」を名乗った¹⁷満田道志により発明されたと言われている。

(13) 鶴の蚊播羽 つるのかすりばね 『毛利家記』には「鶴ノカスリ羽」とある。詳細は不明。

(14) 御下飜茶碗 『毛利家記 六終』には、「御下アケ茶碗」とある。

(15) 片輪車 かたわぐるま 『日国Ⅱ』では「③車の輪が水に流れるさまを圖案化した模様」と説明し、更に東京国立博物館蔵の国宝

「片輪車螺鈿蒔絵手箱」（平安時代作）を「伝存する最古の手箱として極めて貴重である」と解説している。『角川茶道』でも「牛車からはずした車輪を、川の流れの中に二つ三つと組んで、半ば水に浸っている場面を文様化し、美しい流水文様とともに描き表したものと説明しているが、やはり東京国立博物館蔵の国宝で鎌倉時代の作である雲州松平家伝来の手箱についても併せて解説している。この茶会では片輪車の蒔絵の香合が用いられているが、これは東山殿御物と記載されているので、室町時代あるいはそれ以前の作と考えられる。

(16) 省略部分①

一 香箸 カラ金四角

以上

御鑲（鎖）ノ間床

一 御掛物廉ノ繪毛益筆

一 香炉染付友フタ獅子後藤盆ニ陶テ

一 香合青磁ノ柿（柿）内ニ伽羅雨夜入

一 香箸 サハリ六角

以上

御書院ノ床

一 ドラ 一 撞木

一 硯屏 青磁

一 亀ノ御硯

一 筆荷（架） 金ノ物ヘウタンニ菊

一 筆軸るり石彫物有

一 墨 六角

一 哥書二冊

公任ノ古今付ブンチン布袋

(17) 鶴の本白 つるのもとしろ 『日国Ⅱ』では「つるの羽の本白^{はもとしろ}と

して「鶴の羽の下部の小さい羽。鶴の本白。」と説明しているが、『和漢三才図会』によれば本白は真鶴の羽の本を指し、全体的に灰白色の真鶴の「翻かの端、尾の端、保呂ほろの端はいずれも黒く、本はみな白で、これを鶴の本白といい、箭羽やばねにする。また羽箒やばねにして賞したりもする」と記載されている。翻は『大漢和辞典』によれば「羽の莖。羽のもと」と説明されている。

(18) 八景 はつけい 八景釜 『新版茶道』には「茶之湯釜の一種。胴部に八景の山水図様を地紋としたものをいう。八角釜に多いが、形の異なる釜にもある。(中略)『八景地紋釜』(徳川美術館蔵)・『八景尻張釜』(狩野探幽下絵・大西浄林作、東京国立博物館蔵)などがある」としている。中野俊雄氏は「茶の湯釜と鉄瓶の歴史と替底方法」の中で「八景文覆垂釜」(静嘉堂文庫美術館蔵)を「八角釜で胴8面に南面の風景が陽鑄してあり、(中略)尾垂れで内入底にしてある。(中略)桃山時代とされている」と解説している。

(19) 自在 じざい 自在鉤・自在竹の略。『角川茶道』では「上下自在になるところからいう。釜を釣る竹製の道具」武野紹鷗門下で塗師であり、ひとかどの数寄者であったと伝えられる真松齋春慶しんしょうさいしゅんけいが永禄七年(一五六四)に筆録したとされる¹⁹『分類草人木』の『風炉・囲炉裏類』には「一風炉に釜を鎖、自在にて釣ることあり。宗悟釣らるる也。宗珠は之を笑う」と記されている。宗悟とは十四屋宗伍のことであり、宗珠とは村田珠光の弟子とも養子ともいわれる村田宗珠である。宗伍・宗珠の時代には自在の茶の湯への応用が工夫されていたことが窺える。²⁰『南坊録』には「棚」の項目に「自在ハワビノ方ニ用ル、四畳半袋棚ニ組合セ也、(中略)自在ハ紹鷗田舎ニテ見タテ、始ハ茶屋ニカケラレシヲ、宗易四畳半ニ可然由相談アリテ、四畳半ニテカケラレシト云々」とある。本来、囲炉裏に掛けられていた自在であるが、茶の湯における自在の用い方が定まってきたのは紹鷗・宗易の時代という事であろうか。

(20) 休臺子 きゅうだいす 及台子 『角川茶道』には「台子の一種。及第台子ともいわれ、中国宋時代、進士の科擧(官吏登用試験)に合格したもののみがくぐることを許される門の形をとったとも、及第の作文を置く台ともいわれ地板の左右両端中央に柱が二本立てられ、柱の上下にはそれぞれ雲形の小板の付いている棚である。幾つか種類があるが、基本の形は利休形の大(中略)元伯形の小(中略)のものとする」と説明している。¹⁹『分類草人木』の「台子」の項目には「一及第(台)子と云うは唐物也。珠光、日本物に写させ、赤漆にて塗りて、宗珠迄之れ有り。釜と水指、又は水滴など、二つ置く也。柱に柄杓を懸くる釘あり。蓋置も置く事あり。上には小壺・天目、置き合わせる事も有り。*及台子 天板と地板とを二本柱でつないだ形の台子」とある。田口詩織氏他による²¹及第台子伝書(仮題)によれば室町幕府の同朋を務めた相阿弥の伝書『君台観左右帳記』には「試験用の書籍を置く台とされる」とあり、「及台子伝書」部分の翻刻と台子・及第・及第之上棚・及第之下棚の図の写しを掲載して説明している。

(21) 尻ふくら 尻膨茶入 しりぶくらちやいれ 『角川茶道』によれば「茶入の形の名称。下部の膨らんだ形をいい、唐物の形式の一つで、和物にもこれを写したものがあ。名物として利休尻膨が有名である」とある。ちなみに、竹内順一氏によれば利休が所持していた唐物の尻膨茶入、通称²²「利休尻ふくら」は「細川忠興(三斎一五六三〜一六四五)が所持した道具として、(略)永青文庫に所蔵されており、寸法は高さ六・二センチ、口径二・八センチ、胴径六・六センチ、底径二・八センチ、重さは七〇・二グラムです」とある。

(22) 黒楽 くろらく 黒釉を掛けた楽焼。黒楽は形成したものに鉄釉を施して焼成するが、釉が溶けた頃合いを見計らって引き出すことによって黒色となると言われている。楽家の釉は加茂川で採れる

石を砕いて調合されるもので、歴代によって釉調が異なる。楽焼は千利休の創意を受けて楽家初代の長次郎が作り始めたとされている。長次郎の生没年は不詳であるが、中国系の陶技を受け継ぐ人物と考えられている。

(23) 白極 白極緞子 はくぎよくどんす²³ 裂地の話の「緞子」の項目では「縹地または濃萌黄地に鳥襷紋を全面に地紋として織り、上紋に尾長鳥の丸紋互の目に並べ、細い宝尽し紋を散らした緞子」と説明されている。大名物の茄子茶入「国司」(藤田美術館蔵)、中興名物の肩衝茶入「富士山」(湯木美術館蔵)の仕覆の裂として現存する。

(24) イイシャウノ盆 『毛利家記』ではケイシャウ。桂漿。『日国Ⅱ』によれば、「桂漿は漆器の一種。朱、黄、黒の色彩を用いて、色層を掘り出したもの。色が黒く、彫り目に赤や黄色の筋が一筋または二筋ある物。珪璋」としている『角川茶道』によれば、「彫漆の一種か」として、『君台観左右記』の「彫物之名少々」の項目に「桂漿色クロシ、地キウルシ、ホリメニアカクカサネノ筋三アリ」とあり、黄地剔黒の一種で、彫り目に朱漆の層が三本あるものをさしているようである」と推測している。桂昌、圭璋の字もみられる。

(25) 灰擔 はいかつぎ 灰被天目のこと。竹内順一氏(『角川茶道』)はこれを「室町末期から桃山時代にかけて、侘茶を代表する中国産天目の一種。建盞の一種とみる説もあるが、建盞以外の窯業地の可能性が高く、現在のところ産地は不明。極めて素朴な造りで、黒釉が主調だが、その下地に白色ないしは黄色・褐色があり、一種の二重掛かりの釉状を呈して、暗青色や濃褐色にも見えるのが、この天目の第一の特色」としている。「灰冠」「灰潜」とも書き、「はいかむり」と読む場合もある。荒川正明氏は²⁴『中国の一級文物が学習院へやって来た―福建省始末記―』の中で、「じつは天目を生んだ中国では、その天目の生産は福建省・建窯では十三世紀、灰被天目

を産した福建省・茶洋窯ではほぼ十四世紀に、それぞれ生産を終了させてしまう」と述べている。

(26) 天笠着 あまがさき 尼崎台のこと。『毛利家記』には「アマカサキ」とある。『新版茶道』によれば、「唐物天目台。黒漆塗。地付の内に蜈蚣状の印が手書きされているので、蜈蚣台あるいは印台ともいわれる。七台と並ぶ唐物天目台の名物である。尼崎台は徳川美術館(二点)、静嘉堂文庫美術館、根津美術館、藤田美術館などが所蔵しているが、七台は一つも現存していない。

(27) シュトク 珠徳 室町時代の茶杓削師。生没年は不詳。横井清氏によれば、²⁵「姓は深見。室町時代の京都の玉細工師で村田珠光の門下。とくに木製の茶杓作りに創意をあらわし、珠徳型とよばれるスタイルをのみだした」とある。当初は中国から伝来した象牙製の節無し(の葉匙)を茶杓として使用していた。後に珠徳によって削られた木製、竹製の節のない茶杓は珠徳型といわれている。「珠光、初めて珠徳に竹にて削らせたるを、浅茅と名づく」と¹⁹『分類草木』の「天目茶碗、附 茶立様・茶筌・茶巾・柄杓・茶杓」の項目に記されている。

(28) 省略部分②

以上

御座ノ間ノ床

一 御掛物 竜眼子 シュンキヨ筆

一 砂ノ物 鏡盤ニ陶テ

以上

床脇ノ棚

一 御祈念ノ札箱 ニツ

一 伽羅袋ニ名香入袋ハ金入ノ紺地 黒キクリノ盆ニ陶テ

一 焼カラ入六角ノ染付カケ部有下ノ重ニ金銀ノ盤

并ニ右ギン有堆朱ノ四角ノ盆ニ陶テ彫物栗

一封箱内ニ水引有

一御トメ香炉名佛青磁ノクハンコウ

一香合堆朱二重ホリノグリ内ニ伽羅ムグラ入

一香起火筋立金ノ物三足

右堆朱長盆ニ陶テ盆ノホリ物蓮

一紅葉ノ硯箱水入墨筆封小刀双紙キリ

一料紙三色ケサン鉄ザウガンツマミ獅子

以上

御次長囲炉ノ間ノ床

一御掛物 補子梅ノ繪

一印籠四角黒シ内 ノシノカチクリノコンブ 黒キクリノ四角ノ盆

ニ陶テ

以上

御二階ノ床

一御掛物雪舟龍ノ繪

一香炉鶴金ノ物 香臺黒キグリ

一香箸カラ金四角

以上

同下ノ間ノ床

一御掛物 雪舟芙蓉ノ繪

一食籠角ノ唐物二重ニハ五色ノ染米スママニ

結花松梅岩前ニ金ノ小桶五ツ一ツハウロコ枱(形)

一ツハ六角残三ツハ圓シ内ニギンアンニン

松子コンヘイト、ムキ椎下ノ重ニハ

栗餅

一御掛物閑極

一釜 フウリヤウ

一棚ニハ柿ノ香合伽羅入テ羽箒有

以上

(29) 省略部分③

一御掛物 水鳥 和ノ筆

一香炉 鴛金ノ物六角ノ香臺ニ陶テ色赤シ

一香箸 赤銅 竹ノ節

以上

御書院ノ間

一喚鐘

一撞木

一灰入 高麗物

一硯屏 フランダ物

一硯 圓シ蓋有

一筆荷(架) 布袋金ノ物

一墨鳳凰

一水入鹿 金ノ物

一香合モツコウ青貝内ニ名香入青貝ノ圓キ盆ニ陶テ

以上

(30) 「二畳臺上段之棚」と読めるが『毛利家記』によれば「二畳敷上段之棚」と記される。

(31) 壞梅 こぼれうめ 溢梅 『日国Ⅱ』によれば「咲き乱れた梅の花。また、その模様」とある。『毛利家記』には「一御茶入 タカ原袋柿地コボレ梅ニ丸竜ノ金ラン」と記されている。

(32) 吉野高麗 よしのこうらい 「茶会2」でも用いられた茶碗。『毛利家記』のこの茶会の記述では「吉野高麗物」となっている。詳細は不明。

(33) さひ竹 さびたけ 寂竹 池田瓢阿氏によれば「立ち枯れて錆ゴマのでた竹」(『角川茶道』)と説明している。『毛利家記』によれ

ば「黒サビ竹」と記す。

(34) 右之外 御写々々之飾略之『毛利家記』にこの記述はない。

(35) 省略部分④

以上

白木ノ御書院ノ床

一御掛物三幅一對無準

一立花三瓶亀棹二陶テ

以上

床脇ノ棚

一書物卅冊 通鑑

一三重ノ印籠上二重印判下ノ重赤インニクヲ入

堆朱ノ丸盆ニ陶テ

一香炉鴨金ノ物香臺鎌倉彫鏡盤

一沉箱堆朱彫牡丹カケゴ二名香下二香包二

ツ内二薰ヲ金ノ具二人テ

一青貝ノ大食籠内ニ柿入テ

以上

御廣間ノ床

一御掛物雪舟三幅一對

一立花四瓶

一亀鶴ノ臺一對

一香起火筋立香箸灰押

一香炉獅子金ノ物

一香合堆朱彫牡丹ニ鳥内ニ沉香入

右ノ四品何モ棹ニ陶テ

以上

御書院ノ床

一喚鐘 一撞木 一鏡

一軸物二卷行成ノ朗詠黒キグリノ長盆ニ陶テ

一硯屏 一硯

一筆荷 アマ籠

一筆 一墨 一小刀

一水入象金ノ物

一計算 一對

一印籠堆朱四重ホリ人形屋体内ニ松子椎ハシ

ハミギンアン入堆朱ノ盆ニ陶テ此彫モノ人形屋体也

一水瓶堆朱ノ盆ニ陶テ此彫牡丹

以上

床脇ノ棚

一書物 兵衛 呉越 春秋

一沉箱蒔繪鳥タスキ内ニ伽羅袋小フリ何モ内ニ

名香入

一青貝ノ香合内ニ金銀ノ盤入

一グリノ香合ニ香餅入りヤウセン香也

一根大ノ香合ニ伽羅入

一染付エゲノ焼カラ入臺蓋有

一香箸一膳小サジ一ツ円サシ一ツ鉄ウガン

一キウロク黒キ丸盆ニ陶テホリ牡丹

一石菖青磁ノ鉢鏡盤ニ陶テ

一大食籠内ニ梨入堆朱ノ盆ニ陶テ

以上

御納戸構ノ脇ノ棚

一書物水經 注箋

一只天目袋金襴臺朱花形古田織部所持

ノ臺也堆朱ノ盆ニ陶テ彫牡丹

一御茶入古瀬戸尻ホリ袋丹地花兔ノ金ヲ

ン堆朱ノ四角盆ニ陶テ彫牡丹

一葉竈 青貝

一盆石 筑波石盆ハイヒツナリ黒ヌリ砂白シ

一八代集 家共

古今 堯孝筆

後撰 為重筆

拾遺 為忠筆

後拾遺 伏見院

金葉 公助

詞花 宗綱

千裁 氏直

新古今 基綱

以上

(36) 鱒 『大漢和辞典』(十二卷七六頁)によれば読みは「サイ・セイ」意味は「このしろ」である。『毛利家記』には「サイ」と記されている。

(37) 生薑 はじかみ 『日国Ⅱ』では「しょうが 生薑 生姜(中略) 漢名、薑。はじかみ(中略) 室町時代にはシャウガとハジカミが併用されていた。(中略) 江戸後期には(中略) 葉生姜のことを特にハジカミと呼ぶようになっていた」と説明されているが、『薑(はじかみ)の項目では「元来サンショウの開裂した実の意と思われ、初めはサンショウの名であったが、味が辛いところからショウガもさすようになった」と解説している。『古事記』(七十二年成立)に見られる「波士加美」は山椒の古名であり、『観智院本名義抄』(一二四一年成立)に見られる薑はショウガの古名だとも解説している。

(38) 鰯ノ臍 鰯ノ臍 ぼらのへそ 『日国Ⅱ』によれば「いなのお臍」「いなのお白」「算盤」とも呼ばれるようである。「いな(鰯)」はボラの幼魚の名である。算盤というのは鰯の臍の形が算盤の玉に似てい

るためである。鰯の臍は鰯の「幽門」であるが、「幽門」とは十二指腸につながる胃の末端部分。焼くか揚げるかして食べる。食感²⁶は「串にさして塩を振って焼いたものは殆ど腥味がなく、きしきししたゴムのような歯触りにとても気持ちのよいところがあってわたくしは好きでした」と岡本かの子氏は表現している。

(39) 鰯 『毛利家記』には記載がない。

(40) 獨活 獨活 うど

(41) 一ツ焼 ひとつやき ²⁷『古今料理集』の「取合 三下」の「焼物之部」に「一ツ焼物之分」と「切焼物之分」がある。一ツ焼之分には小鯛が例として、切焼之分には鯛が例として挙げられているので、一ツ焼は一尾の魚を焼いたものと考えられる。この茶会の引物として出されている一ツ焼も小鯛である。

(42) 新め和(か) しんめあえ 『毛利家記』には「アへ物」とある。クコの葉は苦みが強いいため、葉を和え物にする場合は新芽を用いる。これを「新芽和」と呼ぶ。

(43) 枸杞 『毛利家記』には「クコ」と記載されているので、枸杞か。

(44) 蝨 蝨の俗字 たいらぎ ハボウキガイ科の貝。たいらがいには「たいらぎ(玉桃)」の異名であり、冬の季語である(『日国Ⅱ』)。『徳川実記』寛永五年二月廿二日の条には「川越の御狩場へ紀伊大納言頼宣使して蝨を獻ぜらる。(紀伊記)」と記述されている。²⁸『オールフォート食材図鑑』には「旬は冬で大きな貝柱は甘みがあつて美味であり、これを食用とする。さしみ、酢の物、焼き物、鍋物などにする」とある。

(45) 鰻子 からすみ ボラ科の魚、鰻(ボラ、イナとも読む)が夏から秋に南に産卵回遊するが、この卵巣で作るのが「からすみ」(唐墨)。中国で作られる墨に似ているところからこの名がある。ウニ、コノワタとともに日本三大珍味に数えられる(『地域食材大百科 第5巻』農文協 一四九頁)。

(46) 麩 ふ 日本語では麩と表記する。麩は『大漢和辞典 卷十二』九三四頁に見える。

(47) 小細螺 こざざえ 『毛利家記』には「小サ、イ」とある。

(48) 章魚 たこ 『毛利家記』には「タコ」と記されている。『日国Ⅱ』には「たこ」を表す漢字として「蛸 章魚 鮪」があげられている。

(49) 著積 じょうよ 薯積か? 『毛利家記』によれば「山ノイモ色付」とある。

(50) 糺水 よりみず 寄水か? 『毛利家記』によれば「ヨリミツ」。寄水は嘉定(祥)菓子の一つである。嘉祥・嘉定は『日国Ⅱ』によれば、「①古くは陰暦六月十六日、疫を除くためといって神に供えた菓子または餅を食べた習慣。(略)名称は、これが行われ始めたとする仁明天皇、嘉祥元年(八四八)の年号によるのもいい、また、室町幕府で用いた宗銭、嘉定通宝によるともいう。(略)②江戸幕府年中行事の一つ。陰暦六月十六日、將軍が大広間に出て、目見以上の士に菓子一種ずつを賜う式」とある。²⁹『嘉定私記』によれば、天保四年(一八三三)の例(十一代家斉)では、江戸城の大広間に二万個をこえる嘉祥菓子八種が並べられた。その内訳は「御菓子惣数千六百拾貳膳 一饅頭三ツ盛 百九十六膳 一羊羹五切盛 一九四膳 一鶉焼五ツ盛 二百八膳 一阿古屋拾二盛 二百八膳 一金飽拾五盛 二百八膳 一寄水三拾盛 二百八膳 一平麩五ツ盛 一九四膳 一熨計二拾五筋盛 一九六膳」とあり、これを大広間二の間の下の方に「豎二拾七膳 横二拾六膳」並べ、同三の間の上の方に「豎三拾五膳 横二拾六膳」を並べて見張り番もつけたことが記されている。

(51) 阿部備中守正次。『茶会集』の中では「阿部豊後守正次」としてあるが誤記。『毛利家記』では「阿部備中守」と記す。

武蔵国岩槻藩主。生没年は永禄十二年(一五六九)〜正保四年

(一六四七)十一月十四日。阿部正勝の長子。初名は正成。幼名は徳千代、善九郎。官職は慶長五年(一六〇〇)御書院番頭となり、同年従五位下備中守に叙任。寛永三年(一六二六)大坂城番となり、正保元年(一六四四)従四位下に進む。徳川家康に近侍していたが、大坂の陣には秀忠に従い戦功をあげる。阿部備中守正次の茶に関する記述は『徳川実記』の中では特筆されるものはないが、後述する永井信濃守尚政、堀田加賀守正盛、柳生但馬守宗矩等と共に秀忠・家光の茶会の相伴客として名前があげられることもある。

(52) 永井信濃守尚政『茶会集』の中では「永井美濃守尚政」としてあるが誤記。『毛利家記』では「永井信濃守」と記す。生没年は天正十五年(一五八七)〜寛文八年(一六六八)。徳川家康に近侍した永井直勝の長子。通称、伝八郎。母は阿部正勝の娘。譜代大名であり、官位は信濃守、老職(老中)。慶長五年(一六〇〇)、父と共に関ヶ原の戦いに従軍し、慶長七年、秀忠の側近となる。元和八年(一六二二)、將軍秀忠のもとで老職となったが、翌九年、秀忠が將軍職を退き西ノ丸に移ったため、土井利勝・井上正就と共に西ノ丸老職となった。『徳川実記(大猷院記)』には秀忠・家光の関わる茶会の記録に尚政の名もみられる。それらを列記する。

①寛永五年九月十四日条「西城にならせ給ふ。尾張大納言義直卿。水戸中納言頼房卿。藤堂和泉守高虎陪し奉る。永井信濃守尚政むかへ奉りて。御茶室へわたらせる。(略)大御所(秀忠)御手前の御茶を進らせられ」

②寛永七年四月九日条「西城にならせられ御茶事あり。永井信濃守尚政御迎に出て。御数寄屋へ導き奉る。紀伊亞相頼宜卿。水戸黄門頼房卿。丹羽宰相長重。立花飛騨守宗茂陪し奉る。御花。御炭も大御所遊ばさる」

③寛永九年十一月廿二日条「二丸御茶室にて。三家に御茶を賜ふ。井伊掃部頭直孝。松平下總守忠明もこれに加はる。(略)永井信

濃守尚政は薄茶つかまつる」

④寛永十三年四月三日条「ことはて、品川東海寺へならせられ。永井信濃守尚政御茶を獻す」

⑤寛永十三年七月十日条「尾紀水の三卿を二丸茶寮に招きたまひ。御茶給はる。毛利甲斐守秀元。立花飛騨守宗茂も伴食せしめられ。(略)永井信濃守尚政御名代として。點茶つかまつるにより。御衣并上下を給はる」

⑥寛永一五年八月六日条「品川の御殿にて。永井信濃守尚政茶を獻じ。青江の刀をさぐ。尚政にも御馬に皆具そへて賜ふ」

⑦寛永十五年十二月十一日条「土井大炊頭利勝別墅にならせ給ひ。数寄屋にて御茶奉る。立花宗成入道立斎。永井信濃守尚政。堀田加賀守正盛御相伴つかまつる」

⑧寛永十六年正月十六日条「この日永井信濃守尚政二丸において御茶を獻じ。猿楽二番あり」

⑨寛永十七年九月廿八日条「月次拝賀例のごとし。(略)この日永井信濃守尚政二丸に於て御茶を獻す」

⑩寛永十七年十月九日条「堀田加賀守正盛が別業にならせられ。正盛御茶を獻ず。酒井讃岐守忠勝。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩御相伴たり」

⑪寛永十七年十一月三日条「雨中御消閑のためと数寄屋にならせられ御插花あり。堀田加賀守正盛。永井信濃守尚政。青山大藏少輔幸成。内藤伊賀守忠重。牧野内匠頭信成。柳生但馬守宗矩。大目付加々爪民部少輔忠澄これにあづかる」

⑫寛永十七年十一月十六日条「午後(略)永井信濃守尚政。内藤伊賀守忠重。牧野内匠頭信成。柳生但馬守宗矩。作事奉行船越三郎四郎長景。使番多賀左近常長をめして廻り花。廻り炭あり。僧澤庵もこれにあづかる」

⑬寛永十七年十二月十四日条「永井信濃守尚政西城にて御茶を獻

ず」

⑭寛永十七年十二月廿六日条「品川御殿にて。永井信濃守尚政御茶を獻す。則包の御刀を給ふ。尚政も信國の刀を獻す」

⑮寛永十八年三月朔日条「未後西城にならせられ。永井信濃守尚政御茶を獻す。よて御刀給ふ」

⑯寛永十八年六月廿八日条「この日西城にならせられ。永井信濃守尚政御茶を獻す」

⑰寛永十八年八月廿八日条「この日永井信濃守尚政西城にて御茶を獻す」

⑱正保元年五月廿九日条「酒井讃岐守忠勝が別墅の新亭經營せしかば。御覽あるべしとて臨駕し給ふ。かの亭にて御茶を獻す。永井信濃守尚政。板倉周防守重宗。柳生但馬守宗矩御相伴に候し」

⑲正保元年七月廿八日条「二丸御茶室にて御風呂の御茶あり。尾紀水の三卿并毛利甲斐守秀元。井伊掃部頭直孝召れてこれを給ふ。御茶は永井信濃守尚政御名代として是をつかまつり。其席にのぞませ給ひ御茶めし上られ。けふは筑紫よりいでたる茶入をはじめて用ひさせたまふ。(略)此日信濃守尚政は御名代として。點

茶つかまつりしにより。御衣并肩衣袴を給ふ」

⑳正保元年八月廿五日条「酒井讃岐守忠勝が牛込の別業にならせられ。茶室にて御茶奉る。阿部備中守正次。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩御相伴に伺候す」

㉑正保元年十月九日条「山里の御茶室にて毛利甲斐守秀元御茶を獻す。堀田加賀守正盛。阿部備中守正次。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩御相伴つかまつる」(茶会3)

㉒正保元年十月廿三日条「二丸御茶室にて酒井讃岐守忠勝。阿部備中守正次へ御茶を給ふ。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩も是に加はる」

㉓正保元年十月廿七日条「二丸御茶室にて永井信濃守尚政御茶を獻

ず。酒井讚岐守忠勝。阿部備中守正次。柳生但馬守宗矩御相伴たり。尚政より備前元重の獻じ。青江の御刀を賜はる」

②④ 正保三年七月廿七日条「尾張亞相辭見あり。二丸御茶室にて御茶を給ふ。水戸黄門并毛利甲斐守秀元。保科肥後守正之相伴たり。御花は手づからあそばされ。御茶は御名代として。永井信濃守尚政恩賜の肩衣。袴を着してつかふまつる。(略) 今日御みずから御茶點し給ふべしと雖も。御手になやみましますゆえ尚政に命ぜられし旨なり」

②⑤ 正保四年五月廿八日条「紀伊大納言頼宣卿辭見あり。二丸にて饗せらる。毛利甲斐守秀元。保科肥後守正之。井伊掃部頭直孝相伴さる。御饗はて、御茶室にて御茶を給ふ。永井信濃守尚政名代として。恩賜の肩衣袴を着し茶を點す」

②⑥ 正保四年十月十六日条「けふ酒井讚岐守忠勝牛込の別墅にならせらる。忠勝口切の茶を獻ず。(略) 次に茶室にわたらせ給ひ。永井信濃守尚政伴食し奉る」

(53) 堀田加賀守正盛 江戸時代前期の大名。生没年は慶長十三年(一六〇八)～慶安四年(一六五二)。家光に殉死した。通称は三四郎。父は旗本堀田正吉、母は稲葉正成の娘。妻は大老酒井忠勝の娘。春日局は義理の祖母にあたる。元和六年より家光に仕え、武蔵国川越藩主、信濃国松本藩主を歴任した後、下總国佐倉藩主となる。官位は出羽守、加賀守、老中。堀田正盛郎には家光による度重なる渡御があつたことが徳川実紀に記されている。渡御のあつた日は以下に示す。寛永十四年七月廿四日、同年八月十四日、同年同月十九日、同年九月二日、寛永十五年十一月六日、寛永十七年正月十三日、同年同月廿一日、同年三月廿九日、同年四月十日、同年五月廿一日、同年六月三日、同年八月五日、同年同月九日、同年同月十九日、同年十月九日、同年十一月七日、同年同月廿七日、同年十二月十六日、寛永十八年正月十六日、同年二月十四日、同年九月

廿八日、同年十月十五日、同年十二月七日、同年同月八日、寛永十九年正月廿二日、同年二月十二日、同年同月二十七日、同年三月二十五日、同年四月九日、同年五月十二日、同年六月朔日、同年同月十八日、同年七月十二日、同年八月五日、同年九月十日、同年九月七日、同年同月二十八日、同年十年十六日、同年十一月五日、同年十二月六日、同年十二月廿七日、寛永二十年正月四日、同年二月十二日、同年三月廿七日、同年四月廿一日、同年五月五日、同年六月廿一日、同年七月廿二日、同年八月十三日、同年同月廿七日、同年九月十日、同年十月十九日、同年十一月廿九日、同年十二月十八日、正保元年正月四日、同年二月八日、同年同月十八日、同年三月十五日、同年四月初日、同年四月廿一日、同年四月十八日、同年五月十二日、同年六月初日、同年六月十四日、同年七月廿三日、同年八月九日、同年八月晦日、同年十二月二十五日、同年同月二十七日、正保二年正月十八日、同年三月廿九日、同年十一月十九日、正保三年十一月廿八日、正保四年十月十二日、慶安二年十月廿一日。これらの渡御のなかで明確に茶の湯が行われた日を太字で示した。次に『徳川実記』の中の堀田加賀守正盛の茶の湯に関わる記述をあげる。

① 寛永十五年十一月六日条「堀田加賀守正盛の邸宅へならせたまふ。まづ数寄屋にならせ給ひ。井伊掃部頭直孝。立花宗茂入道立齋。土井大炊頭利勝御相伴に伺候す」

② 寛永十七年九月十六日条「品川の御殿にて。毛利甲斐守秀元御茶奉る(茶会2)。(略) けさより酒井讚岐守忠勝。堀田加賀守正盛。松平伊豆守信綱。安部對馬守重次は御先にまかり万事を沙汰す」

③ 寛永十七年十月九日条「堀田加賀守正盛が別業にならせられ。正盛御茶を獻ず。酒井讚岐守忠勝。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩御相伴たり」

④寛永二十年正月四日条「堀田加賀守正盛が別墅に立ちよらせ給ひ。正盛茶を獻ず」

⑤同年四月十四日条「二丸にならせられて。堀田加賀守正盛。柳生但馬守宗矩。并に東海寺澤庵御茶を賜ふ」

⑥同年同月十七日条「二丸にて堀田加賀守正盛御茶を獻ず。また猿楽催され。大僧正天海見ることをゆるさる」

⑦正保元年七月廿三日条「午刻堀田加賀守正盛浅草別業にならせ給ひ。新造の茶亭にて御茶を獻ず」

⑧同年十二月二十五日条「堀田加賀守正盛浅草の別墅にならせられ御茶を獻ず」

⑨正保二年十一月十九日条「堀田加賀守正盛浅草別墅にならせられ。茶室にて御茶獻る。御相伴は毛利甲斐守秀元なり」

(54) 柳生但馬守 柳生但馬守宗矩 江戸時代前期の大名。剣術家。柳生藩の祖。生没年は元龜二年(一五七二)〜正保三年(一六四六)三月二六日。柳生石舟斎宗嚴(せきしゅうさいむねよし)の五男として、大和国添上郡柳生に生まれる。初名は新左衛門、通称は又右衛門。母は興原助豊の娘。文禄三年(一五九四)、家康に新陰流を披露して認められ、旗本の士として採用される。その後、関ヶ原の戦いの功により、柳生の旧領を回復する。また、世子秀忠の兵法指南役となり、やがて新陰流が將軍家の御流儀となる。元和七年(一六二二)世子家光の兵法師範となり、厚い信任を受け総目付(後の大目付)として諸大名の監察役となった。官位は従五位下但馬守、総目付。死後、従四位下を追贈された。『玉成衆』『兵法家伝書』を著した。

柳生但馬守宗矩邸には家光による度重なる渡御があったことが『徳川実記』に示されている。その日付は以下に示す。寛永十三年十二月十日、寛永十四年九月十六日、同年十月二十七日、同年十一月六日、寛永十五年二月十日、同年十一月十三日、寛永十六年五月

廿九日、同年十月廿七日、同年閏十一月二日、同年十二月七日、同年十二月廿一日、寛永十七年正月八日、同年二月廿八日、同年三月十六日、同年六月廿五日、同年七月十一日、同年十月九日、同年同月十二日、同年十二月八日、寛永十八年十月廿日、寛永十九年二月廿五日、同年五月十三日、同年九月十三日、寛永二十年三月廿二日、同年五月十二日、同年七月二日、同年十月廿七日、正保元年三月十六日、同年六月十日、同年十一月七日、正保二年閏五月六日、正保三年二月三日、同年三月三日。これらの渡御のなかで明確に茶の湯が行われた日を太字で示した。

また、『徳川実記(大猷院記)』には秀忠・家光の関わる茶会の記録に柳生宗矩の名もみられる。それらを列記する。

①寛永十五年十一月十三日条「柳生但馬守宗矩別墅にならせ給ふ。数寄屋にわたらせ給ひ。御相伴は酒井讚岐守忠勝。永井信濃守尚政。堀田加賀守正盛つかふまつり。御茶華て(略)」

②寛永十六年八月十八日条「二丸より西城にわたらせ給ひ御灸あり。数寄屋にて柳生但馬守宗矩茶を獻ず。酒井讚岐守忠勝。板倉周防守重宗伴食し奉る」

③寛永十六年十二月廿一日条「澁谷邊へならせられ。柳生但馬守宗矩がもとに立ちよらせ給ひ茶宴あり。細川越中守忠利。毛利甲斐守秀元。有馬玄蕃頭豊氏俄に召れお相伴に伺候し」

④寛永十七年十月九日条「堀田加賀守正盛が別業にならせられ。正盛御茶を獻ず。酒井讚岐守忠勝。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩御相伴たり」

⑤寛永十七年十月廿日条「品川へならせられ。かしこの御殿にて澤庵御茶を獻ず。酒井讚岐守忠勝。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩相伴たり。御かへさの道より御使もて澤庵に。瀬戸尻脹の茶入をたまふ」

⑥寛永十七年十一月三日条「雨中御消閑のためとて数寄屋にならせ

られ御花あり。堀田加賀守正盛。永井信濃守尚政。青山大蔵少輔幸成。内藤伊賀守忠重。牧野内匠頭信成。柳生但馬守宗矩。大目付加々爪民部少輔忠澄これにあづかる」

⑦寛永十七年十一月十六日条「午後酒井讚岐守忠勝別業にならせられ。鞭打御覧の後。永井信濃守尚政。内藤伊賀守忠重。牧野内匠頭信成。柳生但馬守宗矩。作事奉行船越三郎四郎永景。使番多賀左近常長をめして廻り花。廻り炭あり。僧澤庵もこれにあづかる」

⑧寛永十七年十二月八日条「柳生但馬守宗矩が別業にならせられ。剣法試み給ふ。又茶宴あり」

⑨寛永二十年四月十四日条「二丸にならせられて。堀田加賀守正盛。柳生但馬守宗矩并に東海寺澤庵御茶を賜ふ」

⑩正保元年四月十三日条「未後二丸にて柳生但馬守宗矩を召て御插花あり」

⑪正保元年五月廿九日条「酒井讚岐守忠勝が別墅の新亭経営せしかば。御覧あるべしとて臨駕し給ふ。かの亭にて御茶を獻ず。永井信濃守尚政。板倉周防守重宗。柳生但馬守宗矩御相伴に候し」

⑫正保元年八月廿五日条「酒井讚岐守忠勝が牛込の別業にならせられ。茶室にて御茶奉る。安部備中守正次。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩御相伴に候す。はて、庭上の松原にて菌狩あり」

⑬正保元年十月九日条「山里の御茶室にて毛利甲斐守秀元御茶を獻ず。堀田加賀守正盛。阿部備中守正次。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩御相伴つかまつる」(茶会3)

⑭正保元年十月廿三日条「二丸御茶室にて酒井讚岐守忠勝。阿部備中守正次へ御茶を給ふ。永井信濃守尚政。柳生但馬守宗矩も是に加はる」

⑮正保元年十月廿七日条「二丸お茶室にて永井信濃守尚政御茶を獻ず。酒井讚岐守忠勝。安部備中守正次。柳生但馬守宗矩御相伴た

り」

⑯正保二年二月十二日条「今年始て酒井讚岐守忠勝が牛込の別業にならせらる。(略)又茶亭にならせられ。忠勝御茶奉り。保科肥後守正之。堀田加賀守正盛。内藤志摩守忠重。柳生但馬守宗矩御相伴に候す」

謝辞

本研究を行うにあたり、史料収集にご協力いただきました名古屋蓬左文庫の皆様、また翻刻を行うにあたりご指導をいただきました社会専修・中村修也先生に深謝いたします。

参考文献

- 1 石井智恵美「『茶会集』の評釈(一)―寛永年間の御成の茶会―」『文教大学教育学部紀要』第五二集 三〇六―三二〇頁、二〇一八年
- 2 渡辺良次郎「徳川家光と茶道」『國學院雑誌』第八十九巻 第十一号 三二四―三二六頁、一九八八年
- 3 『徳川実紀』第二篇・第三篇『新版増補国史大系39』及び『同40』吉川弘文館、一九六四年
- 4 平佐就言 記「他」『毛利輝元公上洛日記』『長周叢書』[20]、一八九二年
- 5 内藤昌「他」『伏見城(Ⅱ)―武家地の建築(近世都市図屏風の建築的研究―洛中洛外図・その4)』『日本建築学会論文報告集』一八二巻 六五―七五頁、一九七一年
- 6 田中哲雄「中世城館の庭園遺跡」『ランドスケープ研究』六一巻 三号 二二二―二二七頁、一九九七年
- 7 山内彩子「江戸城庭園考―『山里を中心として―』」『日本建築学会大会学術梗概集(近畿)』一五一―一五二頁、一九九六年
- 8 「江戸図屏風」国立歴史民俗博物館蔵 一七世紀、「江戸時代初期

- の江戸市街地および近郊の景観を画題として、そのなかに江戸幕府第三代將軍家光の事跡を描きこんだ、六曲一双の屏風。成立期江戸の景観を描いた数少ない史料のひとつであるが、絵画の製作年代にはいくつかの説がある。」と説明されている。
- 9 竹内順一「四大茶会記をよむ(一七九) 桃尻の花入」「孤峰」四一(六)二八〜三二頁、二〇一九年
- 10 桑田忠親校注『山上宗二記』、『茶道古典全集』第六卷 淡交社、五一〜一二九頁、一九七七年
- 11 香取秀眞(かとりほつま)『新撰釜師系譜』香取秀眞一九三〇年
- 12 芳賀幸四郎校注『宗湛日記』、『茶道古典全集』第六卷 淡交社、一三一〜四〇三頁、一九七七年
- 13 千宗左校注『江岑夏書』、『茶道古典全集』第十卷 淡交社、六五〜一〇四頁、一九七七年
- 14 浅野二郎(他)「わび茶と露地(茶庭)の変遷に関する史的考察——織部から遠州へ」『千葉大学園芸学部学術報告』(三六)一一一〜一一八頁、一九八五年
- 15 中村修也「茶に生きた人 古田織部(前篇) 古田織部の登場」『茶道雑誌』第七十七卷 第十号 十三〜十九頁、二〇一三年
- 16 西山松之助「名杓拝見(最終回) 古田織部」『日本美術工芸』五一九(一一)二四〜二九頁、一九八一年
- 17 内田篤典(うちだとく)「棗の歴史 江戸期の塗師——春正、道恵、道志」『淡交』五六(九)三八〜四三頁、二〇〇二年
- 18 中野俊雄「茶の湯釜と鉄瓶の歴史と替底方法」『鑄造工学』七七(二)一一四〜一二二頁、二〇〇五年
- 19 横井清訳注『分類草人木』『日本の茶書1』二七二〜三四〇頁、一九八八年
- 20 久松真一校注『南方録』『茶道古典全集』第四卷 淡交社、一九七七年
- 21 田口詩織(他)「及第台子伝書(仮題)」『同志社大学文化情報学』三(一)七一〜七八頁、二〇一一年
- 22 竹内順一「四大茶会記をよむ(二七二) 利休の尻彫茶入」『孤峰』四〇(十一)三二〜三五頁、二〇一八年
- 23 古賀建蔵『裂地の話』裏千家茶道教科教養編10 淡交社、一九八〇年
- 24 荒川正明「中国の一級文物が学習院へやって来た——福建展始末記——」『学習院大学史料館紀要』一六 一二五〜一三〇頁、二〇一〇年
- 25 横井清訳注『山上宗二記』『日本の茶書1』一六八頁、東洋文庫、一九八八年
- 26 岡本かの子『生々流転』四八頁、小学館、二〇一八年
- 27 吉井始子(他)翻刻『古今料理集』『翻刻江戸時代料理本集成』第二卷 一〇二〜一〇三頁、臨川書店、一九七八年
- 28 全国調理師養成施設協会『オールフォト食材図鑑』二八六頁、調理栄養教育公社、一九九六年
- 29 『嘉定私記』『視聴草』第十一卷 二四〜二七頁、汲古書院、一九八五年